

研究課題 (テーマ)		アクションリサーチによる病棟看護師の摂食嚥下障害患者への食事支援		
研究者	所属学科等	職	氏名	
代表者	看護学部看護学科	准教授	比嘉 肖江	
分担者	済生会富山病院	師長	高田 和加子	
	富山大学	教授	比嘉 勇人	
研究結果の概要				
<p>【調査の目的と意義】</p> <p>誤嚥性肺炎は日本人の死因第7位であり、加齢に伴い嚥下機能が低下する70歳以上の肺炎患者においては、その約70%が誤嚥性肺炎と診断されている。</p> <p>誤嚥性肺炎の看護ケアについては標準化されているものの、個別性の高い高齢者への食事支援における標準化は未整備であり完備すべき課題である。特に高齢化率の高い富山県の医療現場においては、食事(嚥下前・嚥下中・嚥下後)に関連した誤嚥性肺炎に対する方略の明示は喫緊の課題のひとつだといえる。</p> <p>そこで本研究では、施設責任者・認定看護師と病棟担当者(食事支援実践看護師)で編成した、アクションリサーチチーム(ART)を結成して「摂食嚥下障害患者への食事支援の手引DVD」を作成し、手引DVDが病棟看護師にもたらす有用性(態度変容)について検証することを目的とする。</p> <p>ARTによって作成された手引DVDを活用することで、病棟看護師の摂食嚥下障害患者への食事支援に関する知識・技術の向上と当該病院で実習を行う看護学生への波及効果が期待される。</p> <p>【方法】</p> <p>調査対象：施設責任者・認定看護師と病棟担当者(食事支援実践看護師)で編成したアクションリサーチチーム(ART)8名ならびに食事支援実践看護師26名</p> <p>データの収集と分析：質問紙法(無記名)による回答記述の質的内容分析</p> <p>【結果】</p> <p>「ARTが抱える困難事例と課題」と「摂食嚥下障害患者への食事支援の手引DVD」試作のため、事例シナリオに関する質問を行い、以下の結果を得た。</p> <p>特に印象に残っている困難事例として開口困難な事例、認知症患者の事例などが示された。「安全に口から食べる」ことの難しさや「口から食べる」ことの重要性について記述されていた。また、むせ込みのある患者やなかなか食事が進まない患者に対して困難感を抱いていた。</p>				
今後の展開				
<p>上記の内容を踏まえて手引DVDの事例シナリオを草案した。</p> <p>そのシナリオをもとに、DVD教材Ver.0(車椅子事例A, ベッド上事例B)を作成した。</p> <p>2022年から2023年にDVD教材Ver.0に対する意見を調査して「食事支援手引DVDVer.1」を試作し、その有用性を検証する予定である。</p>				